

# 会報

## ◇史学会総会

奈良大学史学会の第三回総会は六月八日(土)六〇一教室で行なわれた。福田祐子学生委員司会のもと、一九八四年度の事業、会計、会計監査の各報告が異議なく行なわれた。ついで、一九八五年度の役員人事案、事業計画案(「奈良史学」発行、会報発行、現地見学会、卒業論文発表会等)と、それに伴う予算案が提案され、それぞれ原案どおり承認された。一九八五年度の役員はつぎのとおり。

▽会長 松山 宏   ▽副会長 鎌田道隆

▽教員委員 菅野 正(編集) 明石岩雄(会計) 青木

芳夫(庶務) 森田憲司(交換)

▽学生委員 大東仁(代表) 原田敬久 石塚忠之 亀田

昌樹 中村真沙美 葉敦子 西川輝久 山田浩之(以上企

画) 杉森節子 豊福孝 望月一志 正多孝幸 普川佳明

尾張文彦 福田祐子(以上執行) 寺川滋 浜田京子 山

下尚幸 広瀬毅 津田真希 阿部顕介(以上広報) 小原浩

美 中西順子 江見信彦 二ノ丸淳子 斎藤智美 坂口知

世子 守田勝豊 中原康(以上編集)

▽監事 堀内一徳 水野柳太郎

## ◇講演会

奈良大学史学科、奈良大学史学会共催による左記のような特別講義が六月八日(土)六〇一教室で行なわれた。

神奈川大学短期大学教授 網野善彦氏

海と中世の日本

京都大学文学部教授 谷川道雄氏

四世紀の東アジア

両先生は幅広いご研究からその一端を講演され、非常に有意義であった。初めての試みとして土曜日の午後の開催であったが、六〇一教室をほぼ満員にする三百余名が参集した。

## ◇卒論中間報告会

今年度は、初めての試みとして、二回に分けて、卒業研

究の中間発表を行なうことになり、十月十二・十九日午後一時から、本学六〇一教室において実施された。一・二回生も含め、二回合せて、一四〇名近くが参集し、熱のこもった報告と討論が行なわれた。

報告者と論題は左のとおり。

十二日

鈴木景二 「古代宮都考」

寺川 滋 「堅田の住人」

山下淳子 「幕末の社会と庶民の『健康観』」

十九日

大原章男 「一九五〇年代末の中共貿易崩壊と我国の対

米従属」

三上 光 「ナチスの支持基盤」

萩原真理子 「辛亥革命をめぐる社会背景」

#### ◇奈良町見学会

十一月十六日

一 昨年の今井町に続く二度目の見学会として、奈良町見学会を十一月十六日（土）に実施した。近鉄奈良駅（行基像前に午後一時三十分集合した約四十名の参加者は、まず花芝町にある社団法人奈良まちづくりセンターで、建築家の松本正己さんの町家についての説明を約三十分間聞き、そのあと松本さんの先導で、元興寺界隈の古い佇まいを残す町並へと向かった。西新屋町辺りでは、軒先に吊り下がっている庚申講の身代り猿と古い町並の醸し出す奈良独特の風情を楽しみながら、用意したレジュメに熱心に目を通していった。御霊神社前では、町並保存等に関する質問がとびかき、参加者の意識の高さが伺われた。このようにして旧

元興寺境内を中心に、二時間余りにわたって行われた見学会は、最後に旧大乘院庭園を見学して終わった。

#### ◇会員動向

○松山宏氏（日本中世史担当）は、一九八五年八月六日から十三日までソ連邦（キエフ・レーニングラド等）へ出張され、歴史的都市の保存の調査などされた。

○森田憲司氏（東洋前近代史担当）は、五度目の台湾訪問をされ、一九八五年八月二十六日から九月五日までの十一日間、台北・台南市・鹿港鎮等で、民俗資料および地方文献の収集にあたられた。

#### 昭和六十年（三月・九月）史学科卒業論文

##### 〔考 古〕

家形石棺の研究

岡戸 哲紀

―畿内特に大和を中心として―

横穴式石室の再利用

奥村 毅

中世墓制の研究

亀山 隆

東四国における前期古墳の研究

下田 順一

墨書土器からみた古代集落の研究

鶴田真佐子

土 馬

中村 悦子

縄文時代仮面の研究  
石硯の考古学的研究

〔日本史〕

湯沐令について

—壬申紀の湯沐の特殊性—

授刀舎人について

律令における権力構造

駅制の創設に関する一試論

中臣鎌足考

古代伊勢神宮の一考察

—奈良時代の政策を中心に—

禪師について

律令の神祇祭祀の成立

紫香樂宮の一考察

—藤原仲麻呂と近江国との関連—

古代の百済王氏について

奈良時代の政治と僧侶の動向

—特に行基の場合について—

衛士について

因幡氏をめぐって

西谷 真澄

米田 敦子

安達 牧人

井上 育映

岩本 潤

菅 春二

佐竹喜己子

須崎 豊子

鈴木 栄治

背古 真哉

高柳ふみ江

谷 英治

寺本 智康

中島 幹史

西原 徳善

官大寺に関する一考察

—平城京への移転を中心として

奈良時代における民衆支配と仏教

檀越と古代の寺院

古代における阿弥陀信仰について

「知太政官事」について

奈良時代における郡司の一考察

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

中世芸能史の一考察

—勸進猿樂について—

庄園制下の問丸について

—木津庄における問の発達—

中世末期に於ける経塚に関する一考察

大和における土一揆について

—初期の徳政一揆を中心に—

紀伊国阿氏河庄について

—上荘と下荘を中心に—

富樫政親と一向一揆

鎌倉御家人について

—鎌倉初期を中心に封建的主従関係（御家人制）を考える—

深井麻須美

宮田 安志

村上 温子

横尾 明美

土居 満義

田中 出夫

井口 宏紀

恵谷 春樹

川上 周二

栗尾真須美

中尾 晴行

西井 恒範

二宮 一幸

半済制度の展開

— 観応擾乱期を中心として —

松田 幸

豊臣秀吉の九州支配について

— 肥後における国人層の動向を中心として —

森山 公清

大和の一向一揆

— 天文一揆を中心として —

八十田由美

承久の乱を中心とする公武関係の推移

矢田 富美

室町時代の地方商業について

— 美濃紙を中心として —

山下 裕

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

織田信長の安土経営について

— 商工業政策を中心として —

石倉 元

封建社会における民衆運動について

— 「おかげまいり」「ええじゃないか」の一考察 —

影山 嘉一

幕末期における藩意識について

— 耶蘇会を通じてみる信長の中世的権威の否定 —

栗原 信二  
佐久間 剛

の検討 —

幕末期における公武合体運動の展開について

— 近世初期における禁教策と貿易保護について —

島原 充司  
高橋 博

石門心学における町人の倫理について

— 幕藩体制確立期に於ける『かぶき者』について —

水流香代子  
中谷 剛美

十七世紀前半における初期幕政の特質について

— 二元政治の展開をめぐって —

永田 雅之

徳川幕府における側用人政治について

— 幕政における役割意識また財政面における諸政策について —

野手 一哉

加賀藩領新川郡における十村の官僚化について

— 幕末期における浜口梧陵の思想と行動 —

榊田 敬子  
山下智栄美

近世中期における古大和川筋の新田開発

— 京都町奉行の職制と民政 —

山田 勝典  
吉江 信子

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

明治初年における堺

— 商工業の推移と鉄道 —

今野 彰

日本軍国主義基盤の形成について

— 近畿地方における郷軍人団体の一考察 —

上田 明

幣原協調外交について

— 特に幣原第一次外交期に於ける大阪商業会議所を中心としたブルジョワジーの中国対策について —

上野 正明

日本の総力戦体制について

— 地方を考慮にして —

河井 利文

明治期におけるキリスト教の受容について

— 士族信徒による農村伝道 —

高木 正彦

一九三〇・四〇年代の農村支配をめぐる

農林省と内務省の対立

朝鮮植民地問題について

—民族代表の評価—

一九二〇年代の融和運動と融和政策について

—岡山県協和会を例として—

関東大震災の歴史的意義について

—帝都復興事業を中心に—

近代酒造業の推移と酒屋会議

徴兵令の研究

—その対外的性質について—

天皇制イデオロギーの民衆への浸透について

—特に教員を媒介として—

戦後の憲法改正

昭和恐慌下における農村問題

—農村経済更生運動についての一試論—

高橋 順之

谷沢 雅美

難波 勇

袴田 寿子

馬場 和彦

山本 伸也

山本 久

橋本 達也

山口 和司

元の染付

—日本の中での染付—

蜀漢政権の成立

—成立過程とその性格について—

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

西域についての考察

—西域南道の歴史的あり方について—

初期明朝政権についての一考察

反日運動における学生及び労働者階級について

—五四期を中心に—

〔西洋史〕

メソアメリカ文明の形成のプロセスに関する

一考察

—オリエント文明と比較して—

第二次大戦後のチェコスロヴァキア

—自由化への模索—

ローマの共和制から帝政への移行に関する社

会の変化

—ローマ衰亡の過程—

ナチスドイツ成立の社会的基盤

「アステカ帝国」の支配構造

—「アステカ帝国」批判と三都市同盟への展望—

成瀬 美絵

不二井良正

井関 昭

藤原 章

山本 淳子

石井 宏明

小川 修

佐藤 一嘉

藤 裕章

津田 宏一

〔東洋史〕

元代の色目人について

宋代の都市と庶民の芸能（演芸）について

游侠と長者について

桑野由紀子

酒井 保固

芭米地義之

「トート」

—その伝説を追う—

独立戦争前後を中心としたインディアンと白人関係の推移

成田 憲司

ペルーにおける「近代化」と大土地所有

二階堂裕之

—スパルタなどの比較—

南沢 慶子

一九三〇年代イギリス外交に関する一考察

吉川 和宜

—チェンバレンと宥和政策—

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

—U・Sスチール会社独占成立史—

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

スペインの新大陸植民地支配

橋野 育子

ポーランド王国の滅亡

堀 千恵子

イギリス市民革命

三輪 千年

中村 誓子

受贈雑誌及び図書 (自一九八四年二月至一九八五年十月)

史艸 (日本女子大学史学研究会) 第二五号

御影史学論集 (御影史学研究会) 第九号、一〇号

信大史学 (信大史学会) 第九号

広島大学東洋史研究室報告 (広島大学文学部東洋史談話会)

第六号

宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報一九八三年度

アカデミア自然科学・保健体育編 (南山学会) 第二卷

十三塚—現況調査編 (神奈川大学日本常民文化研究所調

査報告第九集)

歴史 (東北史学会) 第六三集

秋大史学 (秋田大学史学会) 第三一集

民具マンスリー (神奈川大学日本常民文化研究所) 第一七

卷第六 (一、二号、第一八卷第一、二、五号)

モンゴル研究 (日本モンゴル学会) 第一五号

スペイン史研究 (スペイン史学会) 第二号

聖心女子大学論叢第六四、六五号

アジアアフリカ言語文化研究 (東京外国語大学アジアアフ

リカ言語文化研究所) 第二八、二九号

岩手史学研究（岩手史学会）第六八・六九号

富士論叢（富士短期大学学術研究会）第二九卷第二号、第三〇卷第一号

上智史学（上智大学史学会）第二九号

西洋史学報（広島大学西洋史学研究会）第一一号

キリスト教史学（キリスト教史学会）第三八集

専修史学（専修大学歴史学会）第一六号

アジア研究所紀要（亜細亜大学アジア研究所）第一一号

赤穂事件に関する文芸と思想（学習院大学東洋文化研究所）

群馬県行政文書簿冊目録第二集 大正期行政文書編（群馬

県立文書館）

史海（東京学芸大学史学会）第三一号

愛知大学文学論叢（愛知大学文学会）第七六～七九輯

鹿大史学（鹿児島大学法文学部）第三二号

史観（早稲田大学史学会）第一二二、一一三冊

橘女子大学研究紀要第一一号

岡崎市史研究（岡崎市史編纂委員会）第七号

東海史学（東海大学史学会）第一九号

学習院大学史料館紀要 第三号

史学（三田史学会）第五四卷第二・三号～第五卷第一号

中央史学（中央史学会）第八号

史跡根城跡発掘調査報告書Ⅶ（青森県八戸市教育委員会）

寧楽史苑（奈良女子大学史学会）第三〇号

兵庫県の歴史（兵庫県史編集専門委員会）第二一号

歴史人類（筑波大学歴史・人類系）第一三号

明代史研究（明代史研究会）第一三号

双文（群馬県立文書館）第二号

日本仏教史学（日本仏教史学会）第一九号

ふびと（三重大学歴史教室・同研究会）第四二号

神女大史学（神戸女子大学史学会）第三号

奈良県立民俗博物館紀要第九号

資料館紀要（京都府立総合資料館）第一三号

京都府立総合資料館所蔵文書解題第一冊

宗教思想と山水表現（仏教美術研究上野記念財団助成研究

会報告書第一三冊）

法政史学（法政大学史学会）第三七号

東洋大学文学部紀要第三八集

白山史学（東洋大学白山史学会）第二一号

千葉史学（千葉歴史学会）第六号

中世寺院組織の研究（研究代表者 黒田俊雄）

歴史(東北史学会)第六四輯

日本思想史研究(東北大学文学部日本思想史学研究室)

第一七号

年報中世史研究(中世史研究会)第一〇号

徳川林政史研究所研究紀要(徳川黎明会)昭和五九年度

史苑(立教大学史学会)第四四第一、二号

四庫全書珍本書目録(東海大学文学部東洋史研究室)

群馬県立文書館収蔵文書目録3多野・藤岡地区諸家文書(一)

史窓(京都女子大学史学会)第四二号

三井文庫論叢第一八号

海南史学(高知海南史学会)第二三三号

京都市歴史資料館紀要第一、二号

東京大学文学部文化交流研究施設紀要第七号

酬恩庵所蔵文書目録(田辺町教育委員会)

東洋史苑(龍谷大学東洋史学研究会)第二四、二五号

現代史研究(現代史研究会)第三二号

堺女子短期大学紀要第二〇号

アカデミア(南山学会)人文・社会編第四二号

高円史学(高円史学会)第一号

横浜市立大学論叢第三六卷一・二・三号

### 編集後記

◇多事多難、何かと騒々しかった一九八五年も漸く暮れようとしています。最近になって急激な冷え込みは、遠い国の火山爆発の影響もあるとか、奈良の町も同じです。熱狂のトラ色も消え、冬枯れの静かさが戻り、身震いするような寒さに緊張する十二月となりました。第三号をお届けします。

◇何とか年内刊行をと努力しましたが、少し間に合いませんでした。しかし、本号は、字数を少しつめても、百頁をこすものになりました。日本史関係二篇、東洋史関係一篇の論考と、西洋史関係の史料紹介を載せました。執筆者の辻克美さんは本学卒業生です。他は専任教員です。

◇今後、第四号、

第五号と充実し

ていきたいと思

います。ご批判

を頂ければ幸い

です。どうかよ

ろしくご支援贈

りたくお願いま

す。(S生)

奈良史学 第三号

一九八五年十二月発行

奈良市宝来町一三三〇

奈良大学文学部内

発行者

奈良大学史学会

会長 松山 宏

電話(048)331-1251(代)

振替 大阪九一三二五九九番

印刷所

(有)藝林美術出版社